

葛飾区公開保育を通じた学び合い等支援事業 事業活動実施報告書

施設名(住所)	東江幼稚園(東京都葛飾区東金町2-25-12)		
実施内容	ECEQ®(公開保育を活用した幼児教育の質向上システム)		
各STEP実施履歴	STEP1	事前訪問	令和 7年 7月22日(火) 14:00 ~ 16:00
	STEP2	事前研修	令和 7年 9月17日(水) 14:00 ~ 16:00
	STEP3	「問い」づくり	令和 7年10月22日(水) 14:00 ~ 16:00
	STEP4	公開保育	令和 7年11月28日(金) 9:00 ~ 15:30
	STEP5	事後研修	令和 7年12月10日(水) 14:00 ~ 16:00
公開保育参加者数	26園28名 (うち葛飾区内の保育所6園7名、幼稚園2園3名、認定こども園5園5名)		
STEP1・2で確認した自園の良さ・課題	STEP1・2を通して、自園の大きな良さは「遊びを中心とした保育」と「人との関わりを大切にする環境」にあると再確認できた。自由遊びを軸にしながらも放任ではなく、子どもが主体的に考え、言葉を使い、異年齢の関わりの中で育つ姿が日常的に見られる点は大きな強みである。また、職員同士の関係性の良さや迅速な対応力、保護者の協力体制、自然や身体を使った豊かな体験ができる園庭環境も特徴的である。一方で課題としては、自由度の高い保育ゆえに遊びの発展や深まりが十分でない場面があること、個別対応や職員間の共通理解の徹底の難しさが挙げられた。また、遊びの中の学びを保護者や他の職員に分かりやすく伝える力や、日々の保育を振り返る機会の不足も課題として明確になった。		
STEP3で完成した「問い」	STEP3では、自園の保育の核である「異年齢保育」と「自発活動」に焦点を当てた問いが設定された。具体的には、異年齢の関わりの中で子どもがどのように成長しているか、他者理解や関係性の深まりが見られるか、年長児がリーダーとして育っているかといった視点が中心となった。また、各クラスごとに、活動のねらいに対して子どもの姿がどのように現れているか、充実した遊びとは何か、大人の関わりは適切かといった問いが具体化された。これらの問いは「現状・ねらい・手立て」を明確にし、外部から質の高いフィードバックを得るための重要な仕掛けとなった。問いづくりを通して、自園の保育を客観的に見直し、育てたい子どもの姿や保育の方向性を言語化する重要性が共有された。		
STEP4で気づいたこと、感じたこと、思ったこと	STEP4の公開保育では、他園の保育者から直接意見や質問を受けることで、多くの学びが得られた。日常の保育を公開することで、自園では当たり前として行っていることが他園にとっては特徴的であると気づき、強みと課題の両面を客観的に捉えることができた。また、参加者からの質問に答える過程で、自分たちが無意識に大切にしていた保育観や関わりを言語化することができ、保育の意味を改めて深く理解する機会となった。さらに、日々の保育に明確なねらいを持つことの重要性を再認識し、同じ実践でも意識的に行うことで質が高まることを実感した。外部の視点を取り入れることの有効性と、自園の保育を振り返る意義を強く感じた機会であった。		 

STEP5で気づいたこと、感じたこと、思ったこと	STEP5では、自園の強みと弱みを整理する中で、これまで気づいていなかった点が多く明らかになった。特に「子どもを待つ姿勢」や「時間に縛られない柔軟な保育」「本物に触れる経験」などは潜在的な強みとして再認識された。一方で、遊びの継続性やルールのある遊びの不足、ねらいの理解の曖昧さなど、具体的な課題も浮き彫りになった。また、職員間での認識の違いや課題意識の差にも気づくことができた。重要だったのは、これらの課題を単なる問題として終わらせるのではなく、TRY・KEEP・PROBLEMの視点で整理し、今後の実践につなげる意識が高まったことである。話し合いを通して、園全体で同じ方向を目指す基盤が整ってきたと感じた。	
ECEQ®全体を通して気づいたこと、感じたこと、思ったこと	ECEQ®全体を通して最も大きな気づきは、「保育を言語化し、共有することの重要性」である。日々行っている保育も、振り返りや対話がなければ個人の感覚に留まり、園全体の質の向上にはつながりにくいことを実感した。また、外部の視点を取り入れることで、自園の強みを自信として再認識すると同時に、課題も明確になった。さらに、問いを立てるプロセスを通して、育てたい子どもの姿や保育のねらいを職員全体で共有できたことは大きな成果である。これまで個々に向いていた意識が、園として同じ方向に向かい始めたことも重要な変化である。今回の取り組みを一過性で終わらせず、継続的な振り返りと実践改善につなげていくことが、今後の保育の質向上に不可欠であると強く感じた。	